

## 新たな城を 浜松城と名付けよ。

元亀元年（1570）6月、家康公は岡崎城から居城を移したと伝えられます。その城は、今川氏家臣・飯尾氏の居城だった引間城を改修して築城。経済的に発展し引間宿と呼ばれていた地で、家康公は新たな城を浜松城と名付けたのです。以来、浜松城は家康公にとって戦略的に重要拠点となりました。

### 奈良時代の呼名を 城の名前に

当初家康公は、古代から政治の中心地だった見付に城を築いていました。しかし、織田信長公から「天竜川を越えた東では万が一の時支援が困難」と進言があり計画を変更したとされます。しかし、なぜ「浜松城」と名付けたかは明らかになっていません。そもそも「浜松」という地名は、平安期の漢和辞典「和名類聚抄わみょうるいじゅう」の平安後期版に「浜津」とあり、室町時代のものには「浜松」と記載。さらに伊場遺跡から出土した木簡に「浜津」と記されていたため、奈良時代にはすでにそう呼ばれていたことが明らかになっています。

### 未来を願う心は 今も生きている

「浜津」が「浜松」となったのは、縁起の良い「松」の字を当てたとも言われます。『万葉集』にも行路の無事を祈り松を結ぶ「結び松」という風習が詠まれ、「松」に寄せる思いは想像以上に強かったよう。そう考えると家康公は、歴史を紐解き選んだ「浜松」という名前に、未来を切り開く強い思いを込めたのかもしれない。江戸中期の書『遠江国風土記伝』に浜松は「東照神君開基の地なり」と記されます。今も故郷を家康公が名付けた「浜松」と呼ぶことができるのは、とても特別で幸運なことだと感じるのです。

参考文献 『徳川実紀家康公伝1』/『遠江国風土記伝』/『浜松城下町細見～浜松城下町の名残をめぐる～』/『定本徳川家康』/『萬葉集釋注1』

文・鈴木厚夫/家康公商品開発プロジェクト相談員担当専門家、プランナー、E-アーキテクト代表